

ドイツの詩人たちと人間の自由

——ヘルダーリンとレーナウについて——

岩 崎 允 胤

十八世紀の末から十九世紀にかけて、当時まだ後進国であったドイツのきびしい政治情勢のなかで、人間的自由を高く求めながら、時代の反動と圧迫のもとでついに精神の薄明におちいった二人の詩人、ヘルダーリンとレーナウを本稿では回想することにする（以下の二篇は、二十何年か前に、別々の折に書いた稿に若干加筆して成ったものである）。

1 ヘルダーリンへの回想

——ひとりの精神的ジャコバンの愛の革命的高揚——

1

第二次世界大戦のさなか、ファシズムの嵐の吹きすさぶ日本のみじめさのなかで、ある日、ヘルダーリンは、雷雨に向かって力強く天翔ける鷺の翼をもってわたくしの前に現れた。——

しかし 詩人たちよ わたしたちにふさわしいのは

神の雷雨のもとに 赤裸の頭をもって立ち

父の光を 光そのものを おのが手でつかみ

天上の賜物を 歌につつんで 民衆にわかすことだ

(Wie wenn am Feiertage……, ちょうど祭の日……)⁽¹⁾

かれの詩篇をつらぬく清澄さ、純粹さ、雄偉さ、高揚し敢為する精神は、たちまちわたくしの心をとらえた。それは、一にして全（ヘン・カイ・パン）なる自然、自由な精神の結合する未来の国を、吹きあれる嵐のかなたに、指し示しているようにみえた。そしてそこには、けだかくもやさしいディオティーマの、聖なる楚々とした姿があった。

当初わたくしは、ヘルダーリンの予表をこえた世界を全面的に受けいれて理解するには、精神もまだ十分に強くはなく、だからしてまた、なぜかれが「祖国のための死」をうたうのか、そしてなぜ、

犬死をのぞみはしないが 祖国のために

犠牲の丘に倒れるのなら ねがうところだ

(Der Tod fürs Vaterland, 祖国のための死)

とうたうのか、よく理解できなかった（——封建的な祖国ドイツをうち破って未来の自由のためにたたかうことであることが、のちに分かったが——）。しかし、かれの世界は、そのとき以来、つねにわたくしとともに

あり、わたくしがかれの恩恵をしばし忘れているときにもわたくしをますますつつみ、気づいたときには、わたくしの行手をますます明るく照らしていた。ヘルダーリンの姿はわたくしにとって、——ライナー・マリア・リルケがいみじくもうたったように——「全生命はつねに先へと迫る絵姿だった」（詩「ヘルダーリン」）ということができる。

ディオティーマと呼ばれる女性、ヘルダーリンがフランクフルト・アム・マインで家庭教師をしていた子供の母親、すなわちゴンタルト夫人、ズゼッテである。彼女に寄せるかれの愛の醇乎さについては、「ディオティーマ」と題されるかれの詩がたいへんよく示している。

わたしがまだ幼い夢を結びながら

晴れわたる日のようにやすらかに

庭の樹々のしたで

暖い大地のうえに身を横たえ

ほのかな喜びと美しさにつつまれて

わたしの心の五月がはじまったとき

春風の調べのようにわたしにそよぎかけたのは

ディオティーマの精神の息吹きであった

にぎりなく熱い心の涙を

わたしはいくたびかそのひとのまえで流し

生命いのちのあらんかぎりの調べをかなでながら
やさしいひとの心と一つになった

わたしはまた 心の奥底まで打たれて

しばしばそのひとのいたわりを乞うた

あれほど明るく聖らかに

そのひとの天空そらがわたしに開かれたとき

(Diotima, ディオティーマ)

このまたとない愛を失わなければならなくなったとき、もっとも深い悲しみに辛からくも耐えようとしながら、
かれはこううたっている。

聖いひとよ！ わたしはしばしばあなたの金色こんじきの

きよらかな安らいを妨げました そして 人生の

秘められた深い悲しみのかずかずを

あなたは わたしから聴かれました

そのことを忘れて 赦なぐさしてください あの和やかな

月のまえをゆくむら雲のように わたしは去ります

そしてあなたは 安らいで ふたたび美しく

輝くのです あなた やさしい光よ！

(Abbite, 謝罪)

ゴンタルト夫人との愛、そして悲しい別れについては、これだけでも本質的なことは語りつくされているように思われる。たとえ限りなく多くのことがおそろくお論じられうるであらうけれども……。

ともあれ、わたくしは、若き日にヘルダーリンの作品『ヒュペーリオン』をはじめと読んだときの深い感動を、いまでも忘れることができない。次にこの作品について若干立ちいって考察してみようと思う。

2

作品『ヒュペーリオン』は、ギリシア人ヒュペーリオン⁽²⁾が高い理想をいだいて、やがて祖国ギリシアの独立のためにロシアとトルコとの戦争（一七七〇年）に参加するが、事、志とたがい、その挙は失敗に帰し（ギリシア人への期待も裏切られ）、ひとりさびしくドイツに亡命する過程を取扱ったものである。その間、美しいディオティーマ⁽³⁾との出会い、きよらかな愛、彼女の死、さらに、秘密結社にぞくするアダムスとの出会い、ふたりの強い友情、かれとの別離の物語が、主題的に展開する。作品は、全巻、ヒュペーリオンから友人ペラルミンに宛てた手紙のかたちをとり、回想風に綴られている。ペラルミン宛てのこれらの手紙のなかには、ヒュペーリオンとディオティーマとのあいだの美しい愛の手紙もおさめられている。

外国の支配からのギリシア人の解放という理想実現の失敗、ディオティーマの死、アダムスとの別離、こうした一連の悲しい運命を体験したヒュペーリオンの回想風に綴られた手紙には、冒頭からすでに、深い嘆きの色がこめられている。⁽⁴⁾

「ああ、わたしは行為しなければよかったのだ。それならわたしは現在、どれほどもっと幸福だったろう。どれほど今より希望に富んでいたことだろう」（四ページ）。

「わたしの愛する人たち（とくに、アダムスとディオティーマ……筆者）は、遠くに離れ、またこの世にいない。その人たちのことを伝えてくれる声は、どこからも聞こえてこない」。

「この世のわたしの事業が終わった。わたしは意欲に充ちて仕事におもむいた。その仕事のために血を流した。そして世界を一文も富ませはしなかった」（四―五ページ）。

しかし、このような嘆きの色につつまれながらも、ヒュペーリオンの雄々しい精神はたんなる絶望のなかに、すべもなくたたいたずらに、沈淪^{りん}してはいない。

「けれど、天上の日よ、おんみはまだ輝いている。

「万有とひとつになること、それが神性に充ちた生である。それが人間の至境である。

「生きとし生けるすべてのものと一つになること、おのれを忘れて至福のうちに自然のいっさいのなかへ帰ってゆくこと、それは人の思いと喜びとの頂点である。

「……分かつことのできない統一と永遠の青春が、世界を幸福にし、美しくするのだ。

「そういう高みにわたしはしばしば立つのだ、ベラルミンよ、しかし、一瞬意識がもどると、わたしは下界へ投げ落とされる」（五ページ）。

3

ヒュペーリオンが、運命によって与えられたかずかずの重い痛手にもかかわらず、精神のこの輝く高みをなお失わないでいられるのは、かれの思想と行動とをつらぬいている人類性、その普遍的なイデーのためである。

すなわち、人間の自由のための革命、新しい結合社会の展望、一にして全なるものの思想、聖化された愛。しかも、これらはかれにおいて不可分に渾然と統一している。いま、これらのそれぞれについて、いくつかの章句を断片としてかかげよう。しかし、いわば微分としての断片は積分としての総体を形成し、無限をはらんだおのおのの有限は真の無限を構成するであらう。

1. 人間の自由のための革命

ヒューペリオンは、自由を失い重圧のもとに喘いでいるギリシアの現実、に、変革を、人間の解放をもたらそうとする。闘争によって、行為によって。

「ああ、われわれに押しつぶされている呪いの下では美しい夢さえも栄えることができないのだ。吹きすさぶ北風のように、現代はわれわれの精神の花をおそい、蕾のうちにそれを枯らしてしまふ……」（二二ページ）。

「枯れて腐った樹は、そのまま立っていないがよい。それは、これから育って新しい世界をつくるべき若い生命から、光と空気を盗み取るだけだ」（二三ページ）。

「われわれは枯れた枝や燐^{ひんち}石のなかに眠っている火のようなものだ。この窮屈^{いさ}な縛^{しば}りしめの終わる日を今か今かと待ちこがれ、もがいているのだ。しかし、解放の瞬間はやってくる。長い長い闘争の期間を償って、それはやってくる。そのとき牢獄は神的なものによって破られる。焰は薪を離れて、勝利のかちどきをあげる。そうだ、そのとき、くびきを解かれた精神は、苦悩と奴隷の姿とを忘れ去って、栄光のうちに太陽の殿堂へ帰る思いをするだろう」（四六ページ）。

「わたしの眠りがやがて火と燃える油であることを証^{あかし}しよう」（八六ページ）。

「奴隷の仕事は——と、ヒューペリオンはディオティーマに語りかける——人間の魂を殺しますが、正義の戦いはそれを生かします。……人間がその十分な若さを発揮するのは、身を縛る鎖を断ち切ることによってで

す。人間を救うには、われわれ自身立ち上がって、まむしのように自然のすべてに毒をさすこの世紀を、踏み
にじるよりほかありません。わたしが老いてしまおうとおっしゃるのですか、ディオティーマ、わたしがギリシ
アを解放するそのときに、古いこんで、みじめな、あわれな人間になってしまおうと?……」(八八ページ)。
ヒューペリオンに託するヘルダーリンのこれらの言葉、これらの力強く炎と燃えあがる言葉が、ドイツの現
実にたいするかれ自身のはげしい怒りと、フランス革命の理念をうけいれて「祖国」を変革してゆこうという
意欲と結びつかずには、書かれえなかったことは、確かである。

2. 新しい結合社会への展望

社会の変革はつねに積極的な理念の実現のためでなければならず、建設の意欲なきたんなる破壊であっては
ならない。そして新しい社会は、総体的には調和の理念の実現されてゆく社会でなければならぬ。抑圧のう
ちにある「人間社会の前史が終わり」、やがては新しい歴史が始まるというカール・マルクスの思想^③の先駆を、
われわれは『ヒューペリオン』からきくことができるだろう。このことの物質的な基礎と、それについての科
学的研究はもちろんかれの視野のうちにはまだはいっていないけれども。

「人と人との精神における調和が新しい世界史の始まりとなるだろう」(五六ページ)。

「人間の新しい精神的結合 (der neue Geisterbund) は虚空に生きるわけにはいきません。……共和国
(Freistaat) がいま地上に生まれようとしている」(八七ページ)。

「すべては各人のため、各人は万人のため (Alles für jeden und jeder für alle)」。この言葉には喜びにみ
ちた精神が宿っている」(一〇四ページ)。

カール・マルクスの掲げるコミュニズムの運動の基本理念にも近いこの言葉をうけて、ディオティーマは感
動をこめて次のように書く。

「平和のために、ヒュペーリオンよ、美しい新しい黄金（オウゴン）の平和のために。そのときが来れば、あなたがおっしゃったように、わたしたちの法典に自然の法則（die Gesetze der Natur）が書きこまれ、生命そのもの、そしてどんな書物にも書くことのできない神々しい自然が、共同体（die Gemeinde）の人々の胸にやどることになりましょう」（一〇七ページ）。

だが、ここで述べられている思想は、総じてまだ幻想である。当時としてはまだ幻想にとどまらざるをえない。そのことはまた、かれの行為が実を結ばないこととつながる。いまの引用文で、ディオティーマは「われわれの法典に自然の法則が書きこまれる」ような将来社会について述べているが、ヒュペーリオンにとって、人間の自然との合一は、まだ、どこまでも理性の見地の貫徹によってえられるものとはなっていない。科学的視点がなお欠けている。そこから、神秘主義、そして挫折による現実からの回避という弱さの側面もあらわれ、てくるかもしれない。ともあれ、ペラルミンへの最後の手紙にはこう書かれている。

「こうしてわたしはいよいよ深く自然に身をゆだね、ほとんど際限を知らなかった。自然にもっとも近づくために、わたしは、できるならいっさいの意識を離れ、けがれない日の光のようになりたかった。おお、一瞬でも自然の平和に、自然の美に融け込んだと感じることができたら、それは、さまざまの思いにみちた幾年よりも、あらゆることを試みずにはいられない人間のあらゆる試みよりも、どれほど貴重なことだろう」（一五〇ページ）。

3. 一にして全なるもの思想

古代ギリシアの哲学において掲げられていた「一にして全なるもの（*ἐν καὶ πᾶν*）」の思想を、ヒュペーリオンも最高最善の理念としてとらえる。

「つねに最高最善のものを求めているきみたちよ。知識の底に、行動の喧騒のなかに、過去の密室に、未来

の迷宮に、墓に、それを探ねてやまないきみたちよ。きみたちはその名を知っているか。一にして全であるものの名を。

「その名は美である」（四六ページ）。

ここにあるのは、統一的な世界観、しかも美的世界観である。スピノザ的な神、すなわちここではとくにすぐれて自然が、美として規定されている。そして、この神すなわち自然（*Deus sive natura*）は、ヒュペリオンにおいて、人間の最も内奥の力となる。これは、のちにロマン・ロランのいう、精神の力において偉大な「全人」の思想にもつらなるだろう。ヒュペリオンも、「シシリー島の」エトナの火山のように、わたしたちの存在の奥底から噴き出してくるあの巨大な努力の精神、みずからがいっさいであろうとする意欲」（一四ページ）について語っている。

4. 聖化された愛——ディオティーマへの讃歌

ヒュペリオンにとって、この「一にして全なるもの」を女性として個人のなかに体现していると思われるのが、ディオティーマであった。「一にして全なるもの」について述べたいまの引用文の少し前に、こう書かれている。

「わたしは一度それをみたのだ。わたしの魂が求めている唯一のものを。……最高のものは実在していたのだ。人間と具象とのこの世界に、それは実在していたのだ。」

こうして、ヒュペリオンの魂に、愛の至上の高揚が訪れる。

「きみたちは、自分の求めているものを知っているのか。いまわたしはそれを知らない。けれどわたしはそれを予感する。新しい神の新しい国を……」

「そしてその道をわたしに示してくれたのはあなただ。あなたとともに、わたしの生は始まったのだ。わた

しがあなたをまだ知らなかったころの日々は、生の名に値しない――。

「おお、ディオティーマよ、ディオティーマよ。崇高なひとよ」（四五―四六ページ）。

「この恋の一瞬に比べれば、数千年のあいだに人間がおこない、考えたすべてのことも何であろう」（四九ページ）。

「もっとも美しいものは、またもっとも聖なものである」（同ページ）。

「あるひとの魂が無垢で美しければ美しいほど、その魂は、魂をもたないといわれる他の幸福なものたち、草や木と親しい関係になるのだ」（五〇ページ）。

「ディオティーマは、機会があると、熱心に料理のことを話すことができた。そして確かに何にもまさって気高いものは、一人の気高い少女が、竈かまどの恵みの火を育てて、自然そのもののように、人の心を楽しめます食事を調べてくれることである」（同ページ）。

だが、双の眸から溢れる熱い涙とともに、カラウレアから、祖国の解放のために遠いペロポネソスにヒュペーリオンを送ったディオティーマは、愛するひとが理想の夢に破れてもう一度彼女のやさしい二つの腕のもとに帰ろうと決意したとき、もうこの世のひとつであることができなかった。いまは奥おくつ城きやうに静かに眠る恋人をしるび、ヒュペーリオンは書く、「わたしの恋は、わたしの恋していた、今は亡きそのひとといっしょに葬られてしまった……」（五二ページ）。

「わたしたちふたりは、ただ一つの花だった。わたしたちの魂は一つに融け合っていた。愛しはじめた淡い喜びを、まだほころばぬ花びらのうちに隠していた蕾だった」（五四ページ）。

「わたしは岸べに立って、彼女が永久に眠っているカラウレアのほうを眺める。それがすべてだ。

「海も静まってはくれない。自分で筏いかだを組んで、彼女のところへまでそれをあやつってゆくこともできな

い。

「いっそ荒れ狂う海に身を投じて、波に哀願しようか。わたしをディオティーマの岸边に打ちつけてくれ、と」（同ページ）。

「彼女はわたしのものではなかったか。運命の女神たちよ。彼女はわたしのものではなかったか。清らかな泉たちにわたしは証言を頼もう。それからわたしたちの話をじっと聞いていた無邪気な樹々たち、そして日光とエーテルよ、彼女はわたしのものではなかったか。生のあらゆる調べにおいてわたしと溶け合っていたのではなかったか」（同ページ）。

4

さて、叙述は前後したが、ヘルダーリン（一七七〇—一八四三年）は、シュウアーベン地方ネッカー河畔にある小さな町ラウフェンに生まれた。十八歳のとき（一七八八年秋）、チュービンゲン大学のシュティフト（神学院）に入り、やがてそこで、ヘーゲル、シェリングと同室で起居を共にし、親しい交わりを結ぶことになった。シュティフトの若い先進的な学生たちは、ウエルテンベルク大公、カール・オーゲルのもとでの、窒息しそうな教育体制、さらには、その国全体の専制政治（カール大公はルイ王朝の絶対主義を模範としていた、といわれる）にかれらははげしく反発した。そしてフランス革命の勃発（一七八九年）を熱烈に支持し、ドイツにも自由の世紀の訪れることを望んだ。ヘルダーリンは心情を同じうする友人、ヘーゲルやシェリングたちと「詩人同盟（Dichterbund）」を結び、自由の歌、とくにシラーの「歓喜に寄せる頌歌」（のちにベートーヴェンが「第九交響楽」の合唱のなかにとりいれたもの）を誦したりした、とのことである。

ヘルダーリンは、九一年秋、友人ノイファーに宛てた手紙では「偉大なジャン・ジャックから人権について

教えられた」ことを伝え、「人類に寄せる讃歌はまもなくできあがる。だが、それは晴れ間の作品であるのに、その晴れ間が晴天にはほど遠いのだ！」と書いている。なぜなら、人類とその自由を讃えうるのはほんの束の間の晴れ間にしか許されないほど、かれの身边にはあまりにも重い暗雲がたれこめているからである。「讃歌」はうたう。

おごそかな時が来た

わたくしの胸は命ずる 進むべき路は選ばれている

雲は遠のき 新しい星々がきらめきそめる

……

若人^{わこうど}たちは 神々のように 善良にも偉大にも

すでに 自由の旗を感じとっている

そしておお 傲岸^{ごう}な無頼者を警告しようと

ことごとくの力が 鎖^{くわ}と枷^{かせ}から解き放たれる

……

(Hymne an die Menschheit, 人類に寄せる讃歌)

フランスのあのいわゆる恐怖政治のやり方全体——マルクスはこれを「ブルジョア、プロレタリアの敵である絶対主義や封建制度や素町人をかたづけ（むろんなんら人民的なやり方ではなく）平民的なやり方にはかならない」と特徴づけている——にたいしては、たとえ当時の条件がどのように当該政府にとってきびしいものであったに

せよ、ヘルダーリンはとうてい賛成できなかったであろうと思われる。とはいえ、フランスにおいて、一七九四年七月二十七日、反革命の機をうかがっていた大ブルジョアジー、すなわち、かれらの、後世にいわゆる「テルミドールの反動」によって、反ジャコパンの嵐が一挙に吹きすさび、ジャコパンの仲間にたいする白色テロルが拡大していった時期に、そして、ドイツにおいても、「精神的ジャコパン」にたいする反革命的な「魔女狩り」が始まった時期に、ヘルダーリンは、ジャコパン的な理念を依然として大胆に主張しづける哲学者フィヒテを「人類性のためにたたかう巨人^⑨」とたたえ、かれ自身も、この理念への接近の度をますます強めたものと思われる。

一七九八年頃に書かれた論文「亡びのなかで生まれるもの」のなかで、ヘルダーリンは次のように書いている。「この祖国の没落……は、既存の世界の諸部分において感じられるが、それは既存のものが解体する瞬間と程度にまさしく応じて、新しい到来するもの、若々しいもの、可能なものが感じられるといったぐあいに起こる。けだし、統一なくして、どうして解体が感得されるだろうか。」こうして、すでに古くなった特殊な世界、自然と人間のひとつの特殊な相互関係にかわって、「ひとつの新しい世界、ひとつの新しい、しかしこれまた特殊な相互関係というべきものが、形成される。」^⑩さらに、一八〇四年に刊行されたソボクレスの「アンティゴネー」のドイツ語訳の注解のなかで、ヘルダーリンは次のように書いている。「アンティゴネー」における事件経過の性質は、反乱や革命の際のそれである。そこでは、それが祖國的（国家的）な事件であるかぎりにおいて、次のことが大きく浮びあがってくる。すなわち万人は、無際限の局面転換に捉えられ震撼されて、無際限の形式でおのれ自身を感じるにいたるのである。というのは、国家的な転換は一切の観念形態と形式との転換だからである。「国家的な転換においては、事物の形態がすっかり変り、つねに存続している自然と必然は別の形態をとろうとするのであるが（荒蕪^{こうぶ}になってゆくにせよ、新しい形態をとるにせよ）、このような

変化の時期においては、不可欠であるからこそ存在しているようなものは、すべて、その変化にたいして党派的な関係に立つのである。それゆえに、こういう変化の可能性のあるところでは、「既存の」国家的形式に敵対する者ばかりではなく、中立の者も、時代の精神の力に捉えられて、愛国的、現代的であることを強いられるのである。」

ヘルダーリン自身、数年ほど前に書いた「時代精神」と題する詩で、フランス革命とそれにつづく解放戦争というまさに世界を震撼させる歴史的諸事件の経験をとおして、時代精神にしかととらえられ、生命と敢為へとめざまされたことを、すでに表現している（わたくしが本稿の始めに一節を掲げた詩「祖国のための死」も、同じ頃、同一の思想によって書かれたものである）。

いまこそ 見ひらいた眼で 父なる神よ！ おん身を

迎えさせてください！ おん身こそその光で

はじめてわたしのうちから精神をよびませ

すばらしくも生命へとつれだしてくれた おお父よ！

おん身は 若人らの清純な魂をよびおこし

年老いたものらには賢い技を教えてくださる

邪悪なものだけがますます邪悪になり 父なる震撼者よ！

おん身に捕まって 速かに亡びることになる

(Der Zeitgeist, 時代精神)

ベルトーもいうように、ドイツ的ジャコバンの輝く理想は、ヘルダーリンの詩作のなかにみごとな表現をみいだしているのである。⁽¹²⁾

一八〇五年四月、ヘルダーリンの親友シンクレアが国家顛覆の陰謀をした嫌疑で逮捕され監禁されるという事件がおきた。密告者ブランケンシュタインの書面には、ヘルダーリンの名もあげられていた。かれが逮捕を免れることができたのは、方伯の助けで、ある医者がかれのために、精神異常の診断書を書いたためであるといわれる。さらに「わたしはジャコバンではない。ジャコバンでありたくない。ジャコバンはみな失せよ」と呼んでいたのは、じつはかれが南ドイツで政治運動に参加しており、シンクレアらと共有している計画と思想をもらさなかったための偽装であった、とする説もある。⁽¹³⁾

ヘルダーリンは一八〇六年まではまだ精神異常の徴候を示していなかったことを、ベルトーらは証明しようとしている。だがとにかく、かれの精神は崩れる、親友ノイファーに語りかける詩の断片の示すように……。

わたしの精神は思念をつかもうとした 地上の物をつかむように

しかし 眼まいが精神をやさしくつかんで

精神のもつ思念の 永遠の蒼穹^{そうきやう}はくずれ……

(Brüderlich Herz! 兄弟のような心の友よ！)

なにが——チュービンゲンの盟友、強靱なヘーゲルとはちがつて——かれを精神の薄明へとみちびいたのか。ディオティーマとの別離、そして彼女の死が、重要な要因であろう、と従来説かれており、もちろんそれも重要な要因ではあろうが、やはり根本的には、とくに感受性の繊細だったヘルダーリンにとって、革命へのすべ

ての希望が失われていったドイツのきびしい現実と、かれ自身の「夢」でもある高い理念との矛盾が、かれの精神から支えを失わせたように考えられる。A・アブッシュはこの矛盾をまず第一の理由としてあげながら、結局三つの相互に切り離せない要因のために狂気が訪れた、としている。「ヘルダーリンの、ジャコバンの・ギリシア的な、市民の理想と、かれのドイツ的理想のみじめな現実とのあいだの、かれには解決しがたいものとして現われている矛盾、最も質素な生活をするためのかれの苦しい戦い、および、ディオティーマへの難破した恋愛。」

5

こうして、ヘルダーリンの精神は崩れ、薄明がかれをとらえる。ヘルダーリン「ヒュペリオン」の落日は、あまりにも早い。長い歳月を、かれは、ネッカー川河畔、チュービンゲンの指物師ツインマーの世話で、黄色い塔のなかで孤独に送る。その間、ときおり、驚くほど美しい調和的な世界がかれの脳裏に稲妻のようにきらめき、稀有の詩的表現をとる。さながらそれは「主なくして時ならず美しい音をたてる、絃の切れた金のハープのように」（片山敏彦）。

地上に来ることがあまりに早すぎたヘルダーリンのジャコバンの・ギリシア的な精神は、未来への展望を見失って、そのイデーを、過去——偉大な人々が神々とともに住んでいたとかれの信じているギリシアの古典的な時間——に投影する。いまはじい面影、かつての遅しかった世界の誇りのなかに投影する。神々の時代はすでに過ぎ、現在の時間は、あまりにも乏しいようにかれに思えるからである。そこから、かえって自分たちの来るのがあまりにも遅すぎたと、「パンと葡萄酒」と題するエレギーの第七歌では書くのである。

しかし友よ！ 来るのが遅すぎた 神々はなお生きてはいるが
頭上はるか別の世界に住んでいる

こうして、かれの魂は、いま、神的な充実をうけられるにはあまりにも弱い器でしかないことを告白する。

弱い器はいつも天上のものをうけいれうるわけにはいかない

人間はただときおり神々の充実にたえられるばかりだ
だからして 人生とは神々についての夢だ……

そしてかれはいつそのこと休息につきたいとさえねがう。

…… しかし わたしはときどき

いっそ眠りたいと思う このように友もなしに

このように待ちながら その間 何をなし何をいうべきかを
知らない 何のために詩人は乏しい時のうちにいるのか

(Brot und Wein, パンと葡萄酒)

反革命の嵐の吹きすさぶなかで祖国ドイツの変革への希望が絶たれ、かれはすでに、なすべきこと、いうべきことのすべてを地上では失ってしまっている。かれは没落するほかはない。

だが、こうしたなかでなお、ヘルダーリンの挽歌が不思議な明るさを保っているのはなぜであろうか。おそらくは、「すべては各人のため、各人は万人のため」という言葉のうちに圧縮されるかれのイデーの光が、未来からかれの没落のなかにときおり射しこんでくるからであろう。挽歌ここでは再生を予表するピアニシモにふるへ、やがてそれはゆるやかなアンダンテにかわる。A・アブッシュも書いているように、「エレギーは、人間生活の盛衰のなかでの一定の気分の表現であるだけではなく、否定的な社会状況についての感情を、とくに含蓄ゆたかに、詩的に表現することができるといことが、ほかならぬヘルダーリンにおいて証明される」⁽¹⁶⁾。この不思議な明るさは、いま引用した「パンと葡萄酒」の第七歌のつづく詩句にも早くもあらわれている。

しかし詩人とは——と君は語る——聖なる夜に 国から国へとさすらいゆく
バッカスの神の聖なる司祭のようなものである と

そして、つづく第八歌では、未来の生命への翹望^{きやうぼう}がうたわれる。

パンは大地の果実であるが 光によって祝福されている
そして 葡萄酒の歓喜は 雷^{いかづち}を伴う神から由来する
それゆえ われわれは天上の神々のことを思う かつて実在し
また 正しい時に戻ってくる天上の神々のことを
それゆえ 詩人^{うたひし}たちは真摯なところでバッカスの神をうたう

ヘルダーリンは第七歌の「乏しい時に (indurftige Zeit)」をうけて、この第八歌では「正しい時に (richtiger Zeit)」とうたっている。「乏しい時」は「正しい時」への予表をもっている。それゆえ、乏しい時は、けっして、ハイデガーのいうように、たんに過ぎ去れるものもはや無いことと、来るべきもののまだ無いこととの、二重の無——かれのいう形而上学的な無——にかこまれた、実存的な、孤独の時間ではない。ハイデガーは「詩人は、かく自己の使命のゆえに最高の孤独のうちにあって自己自身のもとにとどまることによって、自分自身の民族を代表し、したがってまた真実の自己の民族のために真理を獲得するのである⁽¹⁷⁾」という。このようにしてハイデガーは、ヘルダーリンが社会に託した理性的なイデーをみることでできないがゆえに、ナチズムにも連なるかれ自身の実存的な思想と行動によって、ヘルダーリンを非合理的な反動的な民族の詩人にしたてあげる⁽¹⁸⁾。

劇詩『エンベドクレスの死』のなかで、古くて聖なるエトナの山頂にのぼり自然と合一しようとする古代ギリシア・シシリー島の哲人エンベドクレスは、民衆にたいし次のような力強い言葉で語りかける⁽¹⁹⁾。

……人間には みずから若返るという

大きな飲びが与えられている

……

敢行するがよい おまえらが受け継ぎ獲得したもの

父祖の口がおまえらに語り教えたものども

おきて
掟と慣習 古い神々の名は

思いきって忘れるがよい そして新生の子らのように

神的な自然に向けて眼をもたげるがよい
……

……おまえらの胸は

武器をたずさえた戦士のように 行為を求め

また自分の美しい世界を求めて高鳴る そのとき

ふたたび互に手をさしのべ 約束の言葉を交わし 財宝を分けあうがよい

おお そのとき 愛する人々よ おまえらは 忠実なディオスクロイのように

行為と榮譽を分けあうがよい そして各人が万人と

等しくなるがよい ほそやかな円柱のうえのように

新しい生命が 正しい秩序のうえに安らい

掟が 君たちの結合を強固にするときよいのだ

(Der Tod des Empedokles, 1. Fassung, 2. Akt, 4. Szene)

ここでも、ヘルダーリンは「各人が万人と等しくなる」（万人のあいだに貴賤や貧富などの不平等がなくなる）ような、正しい秩序にもとづく、未来的な、自由な、人間の結合（Band）について、力強く語っている。そのときこそが、かれのめざす「正しい時」の到来であった。

紺碧の風ぎわたる多島海に突出するスニオン岬、いくたの世紀をとおして赤い岩肌を潮風にさらしてきた断

崖、そのうえに立つ無言の大理石の円柱。そこは、遠い昔に詩人ソポクレス⁽²⁰⁾が、

森深く海に突きいで 波うち洗う

スニオン岬の その果ての地に

訪るることをえば 幸いなるかな

(Sophokles, Aias, 1117～1120, アイアス)

とうたったところ。いまもそのかみとおそらくかわらずに、海上はるかにおもむろにその姿を没してゆく落日
がこよなく美しい。

古代ギリシアの盛衰の歴史を見まもってきた多島海から、ポセイドンの歌が、爽やかな海風にのって遠くド
イツの森まできこえ、ヘルダーリンの詩心をゆする。そして、

Kehren die Kraniche wieder zu dir, und suchen zu deinen
Ufern wieder die Schiffe den Lauf?

.....

にはじまる荘重で雄大な長詩「多島海」が生まれる。この朗々と誦すべき詩の結びの数行を聞こう。

しかし おんみ不死なものよ たとえそのかみのように

ギリシア人の歌がおんみを祝わないとしても おお海神よ！

おんみの波間からなおしばしば わたしの魂のうちにひびきたまえ

泳ぎ手のように 精神が この海上で 怖れることなく活発に

強者の爽やかな幸福を学び 神々の言葉である変遷と

生成とを理解するために そして 疾駆する時が

わたしの頭こゝろをはげしくとらえ 人の世の窮乏と迷いとが

わたしのうつせみの生命いのちを揺るがせることがあれば

そのときには おんみの深みのなかの静寂を わたしに思いおこさせたまえ

(Der Archipelagus, 多島海)

人間の尊厳と自由のために火の炎と燃えるヘルダーリンのジャコバンの精神を、背後からつつむものは、ドイツ的なものとギリシア的なものとの渾然とした統一である。かれの夢は、こうして、生地ネッカー河畔から発し、ギリシアの歴史のあとを締めぐって、ふたたびネッカーの岸辺にもどる。ネッカーこそはまた、そのほとりに臨む古都テュービンゲンで、若きヘルダーリンが、ヘーゲルやシェーリングとともに、「一にして全」なる「新しい国」の盟約を結んだ思い出ふかい土地である。「ネッカー川」と題する詩には、こうして、かれのかかることのない夢と憧憬とがこめられている。そして、そこにはまた、過ぎ去った諸世紀をへだてて無言に立つ古典的世界に寄せるわたくし〔本稿の筆者〕の限らない憧憬もまた織りなされる……。

……わたしはまた

スニオンのほとりにしばしば上陸し 無言の小徑みちに

おんみの円柱のありかをたずねたい オリュンピオンよ！

嵐と 積もる歳月とが アテーンの神殿と

その神々の像との 空しい廃墟のなかに

おんみをも埋めつくさぬうちに おおすでにない

世界の誇りよ おんみは はや久しく

孤独のままに立っている おんみら美しい

イオニアの島々よ！ そこでは 太陽が

葡萄の木を暖めるとき 海風は 熱した岸辺を涼しくし

月桂樹の森を さわめきぬける そして

ああ 金こんじきの秋がくれば 貧しい民衆の

嘆息は おのずから唱和にかわる

おんみら イオニアの島々よ！ おんみらのもとに

わたしの守護霊はいつかわたしを連れてゆくだろう

しかし わたしの心から そのときもネッカーは去りはしない

なつかしい牧場と岸辺の柳とをもつ わたしのネッカー

(Der Neckar, ネッカー河)

注

(1) ヘルダーリンの詩の訳については、片山敏彦、吹田順助、手塚富雄、谷友幸、斎藤信治らの諸氏に負っている。詩の翻訳はいつもむづかしいが、ヘルダーリンの場合も至難なわざである。先人の訳に負いながらも、若干はわたくしも自分なりに努力した。

(2) ギリシア神話では、ヒュペリーオン（ギリシア語的に書けば、ヒュペリーオンとなる）はヘーリオス（太陽神）の父であり、ときとしてヘーリオスの称号ともなる。

(3) プラトンの『シュンポシオン』におけるソクラテスの話のなかに登場する賢い女性がディオティーマであった。

(4) 『ヒュペリーオン』からの以下の引用は、手塚富雄訳、ヘルダーリン全集3、一九六六年による。若干、訳語をかえたところがある。ただし、わたくしたちが戦時中、『ヒュペリーオン』に感激したのは、岩波文庫版の渡辺格司訳によってであった。この訳は、一九九七年春、記念復刊された。

(5) マルクス『経済学批判 序言』全集第一三巻、七ページ。

(6) ヤコービは『スピノザの学説について』第二版（一七八九年）で、レッシングがスピノザの神すなわち自然を「一にして全」として要約したと伝えた。人格神の思想をのりこえ、いっさいが神のうちにあり一であるというこの思想は、内容空疎な神学にみだされなかった当時の青年たちの心につよく訴えるものをもっていた。古くは、「この一にして全なるものが神である」とクセノパネスが言ったと伝えられている（Diels, Vorsokratiker, 4Afl. 1922, Xenophanes A31）。なお、速水敏一『ヘーゲルの修業遍歴時代』一九七四年六八―六九、八二、九二―九五ページ、拙著『ギリシア・ポリス社会の哲学』未来社、一九九四年、一一三―一四ページなどを参照。

(7) ヘルダーリン全集4、一九六九年、一三二ページ。

- (8) マルクス「ブルジョアジーと反革命」全集第六巻、一〇三ページ。
- (9) A. Abusch, Hölderlins poetischer Traum einer neuen Menschengemeinschaft, In: Tradition und Gegenwart des sozialistischen Humanismus, 1971. なお、一七九二年にはすでに、テュービンゲンの友人マールゲナウが「手紙には耳がある」とヘルダーリンに警告しており、この時期の手紙のなかにヘルダーリンの真の思想——ジャコバンへの支持、等々——がはたして表現されているかどうかはむづかしい問題である、とアブッシュは書いている。速水氏の前掲書（八〇ページ）には、「ヘルダーリンは九三年七月末頃には既にジャコバン党支持を止めた」としているが、この判定には疑問があるだろう。他方、ヘルダーリンをジャコバン党员とみるP・ヴァイスの解釈もある（ヴァイス『ヘルダーリン』岩淵達治、野村一郎訳、一九七二年）。アブッシュは書いている、「革命についてのヘルダーリンの考えは、反絶対主義と反封建主義という特徴とならんでいまやすでに強い平民的な小ブル的・革命的な諸要素を示したところの、フランスの民衆蜂起の歴史的に新しい内容を直接的に体験するなかで成長した。このジャコバンのイデオロギイは、全社会の、その社会経済的秩序、その道徳と習俗の、ブルジョア革命の意味における変革を首尾一貫してめざすものであった。テルミドールの連中が革命をすでに裏切ったとき、そしてかれのすばらしい詩『プロナバルテ』でうたわれた若い革命の將軍「ナポレオン」が、若人の精神から、独裁者としての皇帝の精神に変わった（そして軍事独裁的になり、共和制が廃止された）ときでさえも、ヘルダーリンはそのジャコバンのイデオロギイを離れることはなかった」（a. O., S. 30）。
- (10) ヘルダーリン全集4、四三、四四ページ。
- (11) 同上訳、六二ページ。
- (12) 以下ベルトーについては、P. Bertaux: Hölderlin und die Französische Revolution, 2. Aufl., 1970を参照。かれは、その著作で、フランス革命の時期にジャコバン・クラブのメンバーであったという意味でのジャコバンと、フランス革命の理想の支持者であったというより広い意味でのジャコバンとを区別している。（vgl., S. 13, 20）。ヘルダーリンは後者に数えられると思われる。なお、ジャコバンの精神の特徴として、ベルトーは、祖国愛と、統治、軍事裁判における貴族と教会との支配に抗してたたかう革命への革信をあげている（vgl., S. 15）。
- (13) G. Wolf, Der arme Hölderlin, 1973.

- (14) A. Abusch, a. a. O., S. 38.
- (15) 片山敏彦『ドイツ詩集』一九四三年、七八ページ。
- (16) A. Abusch, a. a. O., S. 38.
- (17) M・ハイデガー「ヘルダーリンと詩の本質」『ヘルダーリンの詩の解明』ハイデガー選集3、一九六二年、六九ページ。
- (18) ナチス党機関紙『アレマンネ』はハイデガーの入党について次のように報じている。「ドイツ労働党の日、国民団結の日に、フライブルク大学学長、教授マルティン・ハイデガーは民族社会主義ドイツ労働者党に正式に入党した。われらフライブルグ・ナチス党員はこの行為のうちに、遂行された革命と現権力の承認以上のものを見る。（中略）われらはまた彼がこれまでそのドイツの性格をかくしたことがないこと、彼が年来アドルフ・ヒトラーの党を極力、支持してきたことを知っている」（Der Alemanne, 3. 5. 1933）。そして、五月一〇日、ドイツ各地で公然とおこなわれた焚書の火祭には、ハイデガー自身、フライブルクで学生団とともに参加した。真下信一『思想の現代的条件』一九七二年、八八ページ以下を参照。
- (19) ヘルダーリン『エンペドクレスの死』（第一稿）浅井真男訳、全集3、三二七—三二八ページ、ただし訳文は若干異っている。
- (20) ヘルダーリンはギリシアの悲劇詩人のうちソポクレスを最も愛し、『オイディプス』と『アンティゴネー』をギリシア語から独訳し、注解をつけて発表している（一八〇四年）。

2 レーナウの憂愁

1

レーナウはしばしば「憂愁の詩人」といわれる。たしかにその作品には憂愁や不安の感情が濃くあらわれて

いる。ある解説には次のように書かれている、「もともと内政的で、陰気な生まれだったかれは、父を早く失ったこと、不幸な恋愛を味わったことなどによって、いっそう憂愁にとらわれるようになったが、感じかた、考えかたが、まれにみられるほど純一無難だっただけに、その憂愁をいかげんにごまかすことができず、そのうち瞑想癖、自己分裂に陥るようになり、それが高じて、ついに精神錯乱におそわれて、ある精神病院で生涯をとじるという、悲惨な運命に終ったのである」（実吉捷郎^①）。レーナウが晩年精神錯乱に陥ったのはたしかである。しかし、ただ内向的であり憂愁にとざされていたために、そのことが主たる原因となつて、いたましくもそうした感情の大波に呑みこまれることになったのだろうか。たとえかれの多くの詩には憂愁の思いが色濃く表されているにしても、いったいその憂愁はどこからくるのか。

ニコラウス・レーナウ（一八〇二—五〇年）はハンガリーに生まれ、ウィーンに学び、南ドイツ・シュウアーベンの詩人たちと交わり、一八三二年に北アメリカに旅行した。それは、祖国の政治的な圧迫がかれには耐えがたく思われたためである、といわれる。しかし、一年後には、この地の「前代未聞の町人根性」、その金銭欲に失望してヨーロッパに帰り、その後は放浪の生活をつづけ、四四年にはついに、さきに述べたように精神錯乱の状態に陥つたのである。

レーナウが祖国の政治的圧迫に耐えられなかったというのは、人間の自由を求めるこの精神にとつて、その年少の頃オーストリアで外相を勤めたメッテルニヒが、ウィーン会議（一八一四—一五年）で主役を演じ、やがて宰相（一八二二年）となり、のち四八年の革命によって失脚してイギリスに亡命するまで、約四十年にわたつて反動的なきびしい抑圧の政治をすすめたからである。新しいすぐれた試みが提起されても国家の敵とみなされてしまい、自由の願いや近代的な思想をだれもまともに表現することができなくなった。

レーナウの思想は、メッテルニヒの政治とあいいるところがまったくなかった。そして、メッテルニヒが

ウィーンの革命によって宰相の地位を去ったときには、すでにレーナウの魂は、地上を影のように空しくあてどなくさまよい、もはやこの世のものではなくなっていた。

H・J・ゲルツは『ドイツ文学史』で次のように書いている。「レーナウの生活は強い内的緊張のもとにあった。かれはオーストリアの政治的・反動の精神的圧迫を他の人々以上に強く感じた。かれの芸術家としての成熟の過程は非常に困難な諸状況のもとですすんだ。レーナウは個人的な抗議の段階にはとどまらず、かれ自身の発展を、被抑圧諸民族の蘇生する自由への憧憬との密接な連関のなかにみていた。ヘーゲルの哲学を研究し、かれ自身の関心、自由と人間性への努力を、人間によって確認される歴史の発展諸法則と一致させようと試みた。こうしてかれは、思想を同じうする何百万人もの人々が感じとっていたことを表現に移す、自由の詩人となった。しかし、かれは思想のうえで同時代をはるかに先駆けていた。そのため、孤独者として社会の活路を空しく探り求めるなかで燃えつきたのであった」。

レーナウの叙事詩「アルビ派の人びと」は、十三世紀南フランスにおけるこの派の反教皇運動を弾圧するカトリック教会の殲滅戦を素材としたものであって、そのなかでかれは、自由と人間性の勝利をめざす崇高な思想をうたっている。

さきにわたくしは、レーナウの憂愁はどこからくるのか、という問いをたてた。「アルビ派の人びと」と題する詩のなかでかれは問うている。

われわれの時代の陰鬱な不機嫌

怨嗟や躁急や分裂は どこからくるのか

そして、予言的に次のように答えている。

薄明のなかに死ぬということが

この喜びのない遣り切れなさの素^{もと}なのだ

長く待ちこがれた光を見ることもなく

夜明けのうちに墓場にゆくのは つらい

この詩の末尾には、次のように書かれている。

天の光が粉々にされることはなく

紫^{しほ}袍や黒っぽい僧服で

日の出が蔽われてしまうこともない

アルビ派の人びとにフスの信奉者たちがつづき

かれらの受けた苦しみを血をもって報いる

フスとチスカのあとには ルターとフッテン

三十年戦役とセヴァンヌの戦士たち

バステリュの突撃者たち その他の人びとがつづく

レーナウは、たんに自分ひとりの憂愁を支えきれなかった詩人ではなく、ブルジョア革命と自由との詩

人であり、オーストリアではこの点できわだっているのである。

2

だが、レーナウの抒情詩もまた珠玉のように美しい。かれの内面の憂愁を秘めた、繊細に揺れる心の襞^{ひだ}を、かれの生の喜びと悲しみを、その淡くこまやかな光と翳^{かげ}を、かずかずの詩はみごとに表現している。「森の歌」「海の静けさ」「海の朝」「秋の歎かい」等々。それからまた、「鐘の声」「夕景」「遠くにいるひとに」等々。これらの愁いを帯びた、それでいてふしぎな微光の射しこんでくる作品のなから、次の佳篇「葦の歌」を訳詩として掲げよう。³

葦の歌

1

かなたに太陽は沈んでゆき
疲れた一日は眠りについた
しだれ柳の枝々は 池に垂れている
いとも静かに いとも低く

わたしはいとしい人を避けねばならない
進れ おお涙よ 進り出よ！

柳の枝々は悲しげにさやぎ
吹く風に 葦がおののいている

わたしのひそかな深い悲しみのなかへ
遙かな人よ！ きみは明るくやさしい光を注ぐ
ちようど葦と柳の簇葉むらばをとおして
夕星ゆうすづつの姿が輝いているように

2

あたりは曇り 雲が走り
雨はにわかに降りそそぐ
風は声高こゝたかに歎きたずねる
《池よ きみの星光ほしかりはどこにあるのか》

激しく波立つ池の底深く
風は 消えうせた微光をさがしている
わたしの深い悲しみのなかへ
きみの愛は もう微笑みかけてくれない！

3

ひそやかな森の小徑をとおって
佗しい葦の岸边まで ゆっくりと
夕映えのなかを歩くのは 楽しい
少女よ きみのことを想いながら

やがて繁みが暗くなると
葦はふしぎにたちさわぐ
その歎かいと囁きは
わたしに 泣け 泣け と告げている

わたしは 耳にするようだ
きみの声のひびきが幽かに吹きながれるのを
そして きみの愛らしい歌声が
池のなかで消えてゆくのを

4

日は沈み

黒雲が行く

なんと重苦しく不安げに

なべての風の吹きすぎてゆくことか！

空をつらぬき 荒く

蒼白い稲妻が馳けぬけ

そのたまゆらの姿が

池の面をよぎって走る

稲妻のようにくっきりと

きみの姿が 見えるようだ

そして きみの長い髪毛かみげが

嵐のなかでひらひらとなびくのが！

5

さざなみもたたぬ池のうえに

月のうるわしい輝きがしばし留まり

青白い光の薔薇を編んで

草の緑の穂に花冠をかぶせる

鹿たちはかなたの丘辺をさまよい
小さな眼^{まなこ}をあげて夜の深い闇をみつめ
鳥たちはときおり深い葦の繁みのなかで
夢みるように身じろいでいる

わたしの眼^{まな}ざしは 涙にぬれて俯し
魂^{たま}のもっとも深い奥^{おく}処^かを

きみの甘美な想いがすぎてゆく

静かな夜の祈りであるかのように！

注

- (1) 『世界名詩集大成』6、ドイツ1、一九六〇年、二〇ページ。
(2) Deutsche Literaturgeschichte in einem Band, hrsg. von H.J. Geerts, 1971, S.371.
(3) クネップラーも『不満』『不幸』『傷心』が革命によってのみいやされるということを「レーナウほど明瞭にみていた詩人は多くはなかった（作曲家はさらに少かった）。しかし、少くはない人々がそのことを予感していた」と、当時の状況について書いている。G. Knepler, Musikgeschichte des 19. Jahrhunderts, Bd. 1, 1961, S.496.

